

【書評】

小野寺研太『戦後日本の社会思想史——近代化と「市民社会」の変遷』

以文社, 2015年, 352頁

良い本が出た。戦後日本の市民社会論という、昨今では「古びた」とさえ言われかねない問題に、新しい世代の研究者が斬りこんでいった力作だ。本書は市民社会論に対する在来の各種先入観を捨てて、清新な感性を冷静な筆致に乗せつつ、この戦後日本的な社会思想から現代のわれわれが何を学ぶべきかを語りかける。この本についてはすでに、恒木健太郎からまことに正鵠を射た書評が寄せられている（『図書新聞』2015年11月21日号）。

日本の市民社会論といえば、なるほどかつては戦後啓蒙と革新の思想の一翼を担いはしたが、しかし所詮それは、西欧近代の理想化、国民主義や生産力主義という時代的限界、用語自体の混乱や誤訳に陥っていたといった批判にさらされ、加えて近年は新しいZivilgesellschaft論が台頭するなかで、どちらかというと過去形扱いされることが多かった。その日本の市民社会論を本書は、「ポスト近代」の時代ともされる21世紀現代の眼であらためて問いかなおす。

問い合わせの標的はポスト近代のうちにも厳存し貫徹している「近代」の問題である。近代社会がかかえこんだ大問題は、異質な人間どうしがいかにして広範囲な共同性を実現しうるか——平たく言えば個人と社会の関係——にあるが、著者が市民社会論の核心的問いとして見据えるのは、まさにこの「近代」の問題

である。いわく、市民社会論は「〈近代〉を見いだす文化的機制の中に組み込まれたものである」、「『市民社会』言説が意図したのは、〈近代〉を素材とする近代批判である」と。

内容に立ち入りながらコメントしよう。「序」と「むすび」に挟まれて、本論をなす6つの章が配置される。第1章「戦中期の市民社会概念——統制経済論と生産力論」では、1930年代大恐慌を契機に資本主義が自由主義から統制主義へと転換し、その渦中、戦争体制へと突き進む日本に芽生えた市民社会思想が論じられる。日本では天皇制イデオロギーと結びついた偏狭な統制経済論が横行したが、これに対して、大河内一男・高島善哉らが「生産力」論という形で、普遍的〈近代〉へと軌道修正を図ろうとした。そこに著者は市民社会論の原基を見るが、日本型統制経済論への対抗としての市民社会論という視角を強く押し出した点は教示に富む。

第2章「『人民』の水平的紐帶—戦後初期の内田義彦」と第3章「戦後社会の文化変容と市民社会論—60年代の内田義彦」は内田義彦論である。両章を概括して言えば、市民社会形成の主体として内田が期待を寄せたのは、当初はレーニンゆずりの「労働者と農民」であったが、やがて戦後日本の文化変容とともに、1960年代には、それぞれの専門分野に責任をもって従事するなかで——責任を

もって従事するためにこそ——「学ぶ（学ぼうとする）者」へと転換していった、ということである。適切な評価だと思うが、一言つけ加えれば、後年の内田はその学問する市民という主体像を、執拗に「われわれ一人一人」という言葉で表現するようになる。

問題を他人事として聞き流さないよう、市民各人の胸に迫ろうとする。その「一人一人の学ぶ者」が集団に埋もれることなく物事に「主体的」に参加し、そして、上からの官製路線でなく、各人の連合と協同——分業にもとづく協業——によって「下から」市民社会を形成していくことこそが肝心だというメッセージであろう。そして、その先に展望される社会的物質代謝の民主的かつ合理的な編成こそ内田市民社会論が透視していたものだ、と著者とともに言いたい。内田の〈近代〉はこれ抜きにはありえなかったが、本書が異彩を放つのは、その内田（をはじめとする市民社会論）のなかに市民社会の「自己完結性」の言説を、あるいは市民社会の「歴史哲学」化を嗅ぎとっている点である。歴史は市民社会をもって完結する、とすることへの距離感が漂う。

第4章「『自治』のリアリズム—松下圭一の思想遍歴」では、「自治」のエースを強調する政治学者・松下を丁寧に紹介しつつも、結局は彼の議論も「市民」という普遍性的シンボルの裏側に「日本国民」という特殊性の契機を潜ませるものだったと締めくくる。

第5章「二つの正統派批判—市民社会論的社会主義」は、マルクス原典の虚心な再読を通して当時の正統派マルクス主義を批判した平田清明と望月清司を論ずる。平田における「個体的所有の再建」、「市民社会の継承」としての社会主义論や、望月の「歴史貫通的なゲゼルシャフト」（分業展開史）としての市民社会論が綿密に解きほぐされていく。ここ

でも著者は彼らの議論のうちに、西欧近代という特殊性のうちに人類的普遍性を見出すという、市民社会論の特徴的傾向をあぶり出す。平田論に関しては、グラムシ的市民社会論へと傾斜していった晩年の平田についても言及してほしかった。

本論は第6章「『市民社会』とユートピア—見田宗介／真木悠介の社会理論」で閉じられる。見田＝真木を市民社会論者だとするのは一見異様であるが、そこには著者の強い思いと周到な計算がはたらいており、事実、この章は先の内田義彦論と並んで本書の屋台骨をなす。市民社会論から学びつつも見田＝真木が到達した地平は、市民社会を人類史に普遍的なものとか、将来社会を展望する歴史哲学とかにしないということである。そうではなく、人間は狭い範囲ながらも他者と生きる歓びの世界（「関係のユートピア」）を原点としつつも、より広い世界で自分たち以外の他者と衝突する不幸を最小化しなければならないが、その共存のための「関係のルール」として「市民社会」を位置づける。ここに市民社会は将来展望をひらく歴史的理念から、多様な個が共存しあう——まさに〈近代〉の課題——ための共時的形式へと換骨奪胎される。

その見田＝真木を積極的に評価しつつ、著者は「むすび」で、このように転轍された市民社会論の眼でみれば、市民社会論の難点——普遍性の装いのもとに隠された特殊性のアポリア——も、むしろ〈近代〉そのものがもつ本来的課題として、われわれみなが積極的に引き受けるべきものだという。

まとめよう。「市民社会」を時間的普遍性の理論から解放して空間的形式として読み替えることによって、その合理的核心を救い出そうという著者の試みはひとまず成功している。望むらくは、その空間なるものがたんなる横への広がりといった二次元的平面に終

わることなく、縦への深まり——つまり歴史の深層底流への問い合わせ——をも含む立体的空间において捕捉されることだと思う。内田義彦

を読んでいるとそんな思いに駆られる。

(山田銳夫：名古屋大学名誉教授)